
空を駆け巡る者たち

Douke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空を駆け巡る者たち

【コード】

N3338Y

【作者名】

Douke

【あらすじ】

夜、静かな街で。背中に紅い翼がある少女と、屋根を駆け回る少年の姿が……。

プロローグ

暗くて寒い、夜の街。

四月に入ったばかりで、桜がようやく咲き始めたばかりだというのに、いまだに冬を感じさせる冷たい風が吹いていた。

時刻は午前一時。そんな遅い時間に、家の屋根を飛び移りながら移動する少年の姿があった。

「うっ、寒いよ……。なんでこんな日に出てくるかな……」

歳は高校生ぐらいだろう。その両手には右に白、左に黒と異なる短剣を持っていた。

少年は屋根の上を移動しながら、その視線は空に向けられていた。その視線の先には、地上から約三百メートル離れた上空で、戦闘が行なわれていた。

暗い空よりも黒いもやのような物体と、背中に紅く輝く翼があり、槍を持って目の前にいる物体と戦う少女。

少年はいま戦っている少女を見たことが無かった。

おそらく新しくスカウトされた新参者が、はたまたただの通りすがりか。

けれど、少年にとってはどうでも良かった。

問題なのはどうやってあそこまで行くかだった。

「香里みたいに、僕もウィンドが使えたらいいのに……あっ！」

少女の翼のせいでよく見えなかったが、少女の動きに変化があった。

さっきまで槍を振り回したり、突いたりしていたのに、急に自由に動かせなくなっているみたいだった。少し場所を変えて見てみると、槍の先端が黒い物体に掴まれていた。

このままだと、少女はやられてしまう。

「まずいつ！」

少年は右手に持っていた短剣を腰にある鞘にしまい、ポケットか

ら直径三センチほどの鉛玉とどこにでもある長いワイヤーを取り出した。

そして少年はやられかけている少女の元へと、高く飛んだ。

しかし、いくら少年が力の限り飛んだとしても、空で戦っている少女の元に半分しかたどり着かなかった。

けれど、少年にとってはそれで充分だった。

飛んでいる間にワイヤーに鉛玉を巻きつけ、それを黒い物体に向け投げた。

鉛玉付きのワイヤーが、黒い物体の一部分に絡まったのを確認した瞬間に、少年は地上に落ちる重力も利用して、思いつきワイヤーを引っ張った。

不意打ちに行なった為、すぐには反応できなかった黒い物体は、上空から一気に地上へと落ちた。

しかし、少年にとって予想外の事が起きた。

黒い物体は、あまりにもいきなりだったからか、少女の槍を掴んだままだったため。

「きゃあああ!？」

一緒に少女も、地上に落ちてしまった。

「あ、しまった……」

急いで黒い物体と少女が落ちていった場所に向かって行った。

黒い物体と少女が落ちた場所は、この辺りでも大きい公園だった。

少年が公園に着いたとき、少女は地上に落ちる直前で体勢を整えたらしく、怪我や打ち身などはしていなかった。

「な、なんなのよさっきのは？」

「あ、あの……大丈夫ですか？」

おそろおそろ少年が声をかけてみると、少女は少年を睨みつけた。

「……まさか、さっきのあんたの仕業？」

「う……そ、その、ゴメン。巻き込むつもりは……」

「邪魔に来たのなら、今すぐ退きなさい。あんな奴、あたし一人で充分よ」

そう言って、再び翼を広げて少女は飛び立とうとした。

少年は急いで少女の腕を掴んで止める。

「何よ？」

「い、いや……ここは僕たちの担当地区だし、そ、それに君、ボロボロだよ？」

暗かったのでよく見えなかったが、少女の服はあちこち破けていて、少女自身も擦り傷だらけだった。

「そんなの関係ないわ。あれはあたしが見つけたんだからあたしの獲物よ。それに、こんなの全部かすり傷よ」

「そ、そうかもしれないけど、僕たちにも仕事しないといけないし……」

少年は少女の剣幕におどおどしていたが、少女はある事に気付いた。

「……？ あんた、あたしと同じ同業者のはずよね？ なんで翼が無いわけ？」

「あ、えっと、これには少し深いわけが……っ！」

少女は少年を見ていたため気付かなかったが、どこかに隠れていたさっきの黒い物体が鋭い爪を立てて、少女を後ろから襲おうとしていた。

「危ない！」

少年は急いで少女を横に突き飛ばす。

本来、少女に振り下ろされるはずだったその爪は、そのまま少年の体を切り裂いた。

「……………え？」

突き飛ばされた少女には、目の前で起こった光景がすぐには理解できなかった。

少年の体は、左肩から腰まで斜めに深く切り裂かれた。その傷は、心臓や肺、その他の臓器も抉られていた。

口から込み上げてきた血を吐くと、その場にゆっくりと倒れ

少年は死んだ。

パート1 朝の登校

「あーねむ……」

昨日、いや時間からしたら今日か。

まあどつちでもいいけど、あんな夜中に仕事したから少し寝不足になってしまった。

だからと言って、入学式に遅れるわけにはいかない。

一昨日届いたばかりの制服に着替え、筆記用具などを鞆の中に入れてる。

そして、『竹川亮一』と書かれた生徒手帳をポケットに忘れないように入れる。

俺が通うことになる高校は、この生徒手帳が無いと中に入れないという、かなりセキュリティが高い学校だ。もしこれを無くしてしまうと、めんどくさい手続きをしないといけないうえに、欠席扱いされてしまう。

準備が整って、キッチンで朝食用のパンを焼こうとした時、俺のケータイにメールが届いたと知らせる着信音が鳴った。

こんなまだ朝早い時間にメールしてくるのは、あいつしかいない。

ケータイを見ると、予想通り『佐藤香里』と画面に表示されていた。

ちなみに内容はこうだ。

『亮ちゃん、ちゃんと起きてる？』

「……ったく、いちいちメールしなくても平気だったのに」

世話焼きな幼なじみに苦笑しながら、きちんと起きていると伝える。

このまま返信をしないと、メールと電話のオンパレードになるからな。

返信メールを打っていると、キッチンに俺の枕を抱きながら入っ

てくる女の子が。

「……………」
「お、起きたか。お前も一枚食べるか？」

「……………」
「うん」
こいつは鈴木瑠璃。この家の居候、というか俺がある事情で拾ってきた子だ。

ついさつき起きたばかりらしく、眠い目を擦りながら瑠璃は答えた。

「……………」
「学校、今日からだっけ？」

「ああ。お前はどつする？ もう少し寝てるか？」

「……………」
「いい。亮ーが行ってる間、家事とかしてるから」

「そうか、ありがとな」

そう言いながら頭を撫でてやると、瑠璃は気持ち良さそうに目を閉じてそのまま。

「……………」
「くー」
「寝るなー！」

家を出て、五分くらい歩いたところにあるコンビニで、香里と一緒に学校に行く約束をしていた。

俺が着いたときには、すでに香里の姿があった。

「悪い。待たせたか？」

「ううん。私もさつき来たばかりだから」
「……………」
「嘘、なんだろうな。」

こいつとはもう十年以上も一緒にいたから、どうせ待ち合わせ時間の三十分前からここにいたんだろう。

だけど、それは香里がそうしたくてしたわけだろうから、俺は何も言わなかった。

「それより親父から聞いたぞ？ お前、生徒会の一年会長をする事

になったって」

「もう聞いちゃったの？ まったくあの人は……」
頼に手を当てて溜息をつく香里。

俺が通う高校、その名も『藍瀬久学園』は私立高校にしては学費が安く、設備が他の高校よりも整っているの、かなりの人数が入学してくる。

そのため、いろいろと厄介ごとが毎年起こるらしい。

その対策として、生徒会を各学年に分け、少しでも減らすことにした。

生徒会長をやらされる条件は、その年の入学試験でもっとも優秀な人が選ばれる。

今年は香里が選ばれたみたいだけど、まあある意味当然だと俺は思っていた。

なんせ香里は成績優秀、容姿端麗、運動神経抜群と、まるでどこぞの小説かのように、どこから見ても完璧超人だからだ。

おまけに俺と同じ同業者で、実力は俺よりも上だ。

ちなみに余談だが、俺の父親は藍瀬久学園の校長を勤めてたりする。

「あ、あと昨日のことなんだが、本部の方から新しい同業者が来るって連絡あったか？」

「本部から？ 別に何もなかったけど……。後で私が確認しておこうか？」

「いや、報告書出すと同時にその事についても書いておいたからいいよ」

「……そういえば聞くの忘れてたけど、昨日会った時と人格が変わってるのはどうして？」

「……ま、まあ、ちよいと油断したみたいだな……」

「……あとで、きっちり報告書読ませてもらうからね」

そんな会話をしながら、俺は昨日会った少女の事について思い出していた。

あいつ……いったいどこから来たんだ？

世の中には、平穏な日常を生きている裏で、毎日人々を守るために仕事をしている者たちがいる。

その者たちの事を、俺たちは『言霊使い』と呼んでいる。

パート2 入学式

『言霊使い』

この単語を知っている人は、世界でも数少ない。

言霊使いとは、言霊で作られた自らの翼で、武器で『グチ』と呼ばれている敵を倒す。

辞書で言霊を調べてみると、言葉に宿っている不思議な力と出てくる。が、その言霊とは少し違う。

俺たちの言霊というのは、形となる想像を頭の中で描き出し、言葉として出す事で実現させる。

そしてグチ……。勘のいい人はすぐ分かるかもしれないが、漢字で愚痴と書く。

つまり、人間から生まれた愚痴を言葉で解決させる。

人間がよく呟く愚痴は、自分でも知らない内に溜まっていき、それが現実に実現してしまうことがある。

その形は様々だけど、一番の特徴は大きさだ。

溜めた愚痴に対するストレスが大きければ大きいほど、その形は膨らんでいく。それはもう、テレビ番組で出てくる怪獣みたいに。

その無意識に出てくるグチを倒すのが、さっきも言ったが言霊使いの役目だ。

とまあここまで正義のヒーローみたいに言ってみたが、実際言霊使いをしている理由はグチを倒す事によって、政府から多額の賞金がもらえるからだ。

しかし、その分危険も伴うし、政府も多額の賞金をあまり多人数に渡すとすぐに国は破産してしまうため、言霊使いをやる人も知っている人も少ない。

そして、俺たちはお互いのことを仲間と呼ぶのではなく、同業者と呼んでいる。

「皆さんこんにちわ。この度一年生徒会長に選ばれました高橋香里です」

入学式。

いま舞台では香里が生徒会長として挨拶をしていた。

周りの俺以外の生徒達は、香里の美貌にどうやら見惚れているようだ。お、あいつなんかは一目惚れした表情だな。

まあ俺はほぼ会っているから、どうとも思わないけど、意外と香里の声って綺麗だったんだな。

いつも聞いているはずなのに、まるで香里の知らない一面を見たような気がした。

香里の挨拶が終われば、あとはもう自分のクラスに移動するだけだ。親父から事前に聞いていたので、わざわざ職員室の横にある掲示板まで見に行かなくて済む。ちなみに俺と香里は同じクラスだ。

今日は明日やる事についての説明ぐらいなので、早く帰れて昼ぐらいか。途中で昼飯を買って帰るとするか。もし瑠璃が作ってくれたとしたら、その時は全部食べればいいし。

「亮ちゃん、私の挨拶どうだった？」

「良かったと思うぞ。これから大変そうだな」

「? どうして?」

だって、お前に告白してくる男子がたくさんいそうだからな。

「まあそれはともかく、香里は学校が終わったあとどうするつもりなんだ?」

「少し生徒会に呼ばれてるから、終わってもしばらくここにいてと思うよ」

「分かった。じゃあ待とうか?」

「ううん。亮ちゃんは先に帰ってていいよ。瑠璃ちゃんのことがあるし」

それなら、そうさせてもらおうとするか。

クラスに着くと、まばらだがもう人が来ていた。

中には中学のときに学校が同じだった人や、他校から来た見知ら

ぬ人もいる。

他にも昨日、見覚えがある人とか……。

「……あれ？」

「な、なんであんたがここにいるのよ!？」

何故か、昨日の夜に出会った同業者である少女の姿があった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3338y/>

空を駆け巡る者たち

2011年11月10日00時16分発行